

佐久西小学校裏遺跡

——縄文後期土壙墓群の調査——

昭和59年3月

長野県南佐久郡佐久町教育委員会





佐久西小学校裏遺跡

——縄文後期土壙墓群の調査——

昭和59年3月

長野県南佐久郡佐久町教育委員会

序

佐久町西小学校裏遺跡を終了して

佐久町大字高野町字吹上1770番地は、佐久町中央部平坦地高野町地区の西方に位置する台地上にある。この台地は南佐久郡考古学的調査（八幡一郎著）に、和田上（佐久市瀬戸）とならんで本郡の遺跡の双壁であると、記されている佐久町西小学校裏遺跡である。古くから遺物の種類、数量の豊富な事で知られていた。これらの埋蔵文化財を保護していくことは、現代に生きる私共の責務と考えている。

現在、この台地（三本木団地）は宅地化が進み、未調査のまま見すごされてきた。おそまきながら、千曲病院医師住宅第一棟及び第二棟の建設予定地を発掘調査すべく計画した。

佐久考古学会員井出正義、島田恵子、三石延雄の三氏及び県教委文化課郷道主事の手厚い御指導をいただき、小規模ではあるが調査実施することが出来た。この発掘調査によって、この道の専門家の方々の充分な究明によって、佐久町の先人の歴史の一端を知ることの資料となり得るものと確信しております。

本調査を実施するにあたり、千曲病院の事務局の協力又調査に先だつて、重機を使って掘土に御協力をくださった建設業者の方々の御厚意に対して感謝を申し上げます。

調査員の先生方及び学校関係者の方々の御奉仕にかさねて厚く御礼を申し上げ、巻頭の言葉といたします。

昭和59年2月

佐久町教育委員会
教育長 新海 秋人

例 言

1. 本書は、昭和57年12月9日～10日を第1次とし、昭和58年8月10日～8月21日を第2次として発掘調査された。長野県南佐久郡佐久町大字高野町字吹上に所在する佐久西小学校裏遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、佐久町教育委員会が実施した。
3. 本調査は、井出正義を団長とし、地元の長野県考古学会員を調査員に、千曲病院・佐久町文化財保護委員、町会議員、学校給食職員、三本木団地の方々の協力を得て実施した。
4. 本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成は、井出正義・三石延雄・島田恵子が行い、トレースを島田恵子が担当した。
5. 本書に挿入した写真は、井出正義・島田恵子が撮影したものを使用した。
6. 本書の執筆は、調査員が行い、文末にそれぞれ文責を記した。
7. 本書の編集は、島田恵子が行い、井出正義が校閲・鑑修した。
8. 本遺跡の資料は、佐久町教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたり、長野県教育委員会文化課指導主事郷道哲章先生に御指導をいただいた。報告書作成に関し、井戸尻考古館長武藤雄六氏に御指導を賜わった。また、千曲病院事務長井出武彦氏、篠原工業の社長および工事にあたられた社員の方々、表土削平にご協力下さった新海建設、佐久西小学校、千曲病院黒田賢二医師宅、三本木団地の方々からは、物心両面にわたる御援助を賜わり厚くお礼を申し上げる。

凡 例

1. 検出遺構の略号は次の通りである。縄文時代住居址-J、土壇-D、溝状遺構-M。
2. 住居址・溝状遺構実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ 、土壇実測図 $\frac{1}{50}$ 、炉址の実測図は $\frac{1}{50}$ に統一してある。
3. 土器・石器の実測図および土器拓影図は $\frac{1}{50}$ に統一した。
4. 水糸レベルの統一は原則として各遺構ごとに行った。
5. 図版中遺物の縮尺は、土器・石器等約 $\frac{1}{50}$ とした。
6. 図版中では遺物の番号を簡略した。例えば第5図1は5-1と表わす。

本文目次

序

例言

凡例

本文目次

挿図目次

附表目次

図版目次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 調査の概要	2
第3節 調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 考古学的及び歴史的環境	6
第3章 層 序	9
第4章 遺構と遺物	11
1. 住居址	11
1) J1号住居址	11
2. 土 塋	14
1) D1号土塋	14
2) D2号土塋	15
3) D3号土塋	16
4) D4号土塋	16
5) D5号土塋	17
6) D6号土塋	19
7) D7号土塋	19
8) D8号土塋	20
9) D9号土塋	21
3. 溝状遺構	22
4. 調査区域内出土土器	23

5. 石器	23
第5章 考察	30
引用参考文献	34

挿図目次

第1図 発掘区設定図	1
第2図 佐久西小学校裏遺跡の位置と周辺遺跡	7
第3図 層序模式図	9
第4図 検出遺構全体図	10
第5図 J1号住居址実測図	12
第6図 J1号住居址炉実測図	13
第7図 J1号住居址出土土器拓影	13
第8図 D1号土壇実測図	14
第9図 D2号土壇実測図	15
第10図 D3号土壇実測図	16
第11図 D4号土壇実測図	17
第12図 D5号土壇実測図	18
第13図 D6号土壇実測図	19
第14図 D7号土壇実測図	20
第15図 D8号土壇実測図	21
第16図 D9号土壇実測図	21
第17図 溝状遺構実測図	22
第18図 遺構内出土土器実測図	24
第19図 調査区出土土器拓影No.1	25
第20図 調査区出土土器拓影No.2	26
第21図 調査区出土土器実測図	27
第22図 D4号・D5号土壇出土土器実測図	28

付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	8
-------------	---

図版目次

- 図版一 1. 佐久西小学校裏遺跡遠景
2. 佐久西小学校裏遺跡発掘調査第2区全景（58年度調査）
- 図版二 1. J1号住居址
2. D1号土墳
- 図版三 1. D2号土墳
2. D3号土墳
- 図版四 1. D4号土墳
2. D5号土墳
- 図版五 1. D6号土墳
2. D7号土墳
- 図版六 1. D8号土墳
2. D9号土墳
- 図版七 1. J1号住居址出土土器
2. D1号土墳・D3号土墳出土土器
- 図版八 1. 調査区出土土器片No.1
- 図版九 1. 調査区出土土器片No.2
- 図版十 1. 調査区出土石器

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査に至る動機

昭和57年12月9日、千曲病院医師住宅第1棟の基礎工事中に遺構が認められたので、急提9日～10日緊急調査を実施して、土墳墓4、炉址1を検出した。

その後、同病院の第2棟の建設が予定されていたので、調査員および県教委文化課指導主事郷道哲章先生の指導を受けて、小規模ではあるが発掘調査の計画を立て、昭和58年8月10日～21日まで、昨年の調査区の続き約250㎡を調査する運びとなった。



第1図 発掘区設定図(1:1,000)

第2節 発掘調査の概要

- 遺跡名 佐久西小学校裏遺跡
- 所在地 長野県南佐久郡佐久町大字高野町字吹上1770
- 発掘期間 昭和57年12月9日～10日（第1次）
昭和58年8月10日～21日（第2次）

●調査に関する事務局の構成機関は下記の通りである。

新海 秋人	佐久町教育委員会教育長
井出 保夫	〃 〃 主事
青柳 鈴子	〃 〃 主事

●調査団の構成は下記の通りである。

団長 井出 正義（長野県考古学会員）

調査員 三石 延雄（ 〃 〃 ）

白倉 盛男（ 〃 〃 ）

島田 恵子（ 〃 〃 ）

協力者 篠原 衛敏、木内和太郎（文化財調査委員）、高見沢良夫（町会議員）

三井 由子、桜井 京子、安井 和子、浅川さと江、草間 嘉子、

岡部 初枝、井出 勝子、木内 ゆう子、木内 方子（学校給食員）

阿部 順一、木内 昭雄、

沖浦 悦夫（南佐久郡誌刊行会）

（文責事務局）

第3節 発掘調査日誌

○昭和57年12月9日（木）曇

佐久町立千曲病院が医師職員宿舎建設基礎工事に着工、ショベルカーで掘り起こしていると、鉄平石などの敷石にぶつかる。ここは佐久西小学校裏遺跡の中に三本木団地が造成されたため、ここだけが胡桃林として残された土地である。9時半頃、知らせをうけた島田、三石、井出が現場にいき、篠原興業重機オペレーター社長

力によって、二日間の緊急調査をすることになった。道具はショベル、ジョレン、移植ゴテ、金箕等を佐久西小学校小山康夫教頭より借用する。土壌基4基の存在を確認し、そのうち2基を本日調査する。

昼食事、高橋公民館長に依頼して、役場建設課から平板測定の用具を借りる。

新海秋人教育長より県文化課に連絡をとる。午後、新海教育長、篠原衛敏文化財調査委員

長、高橋保雄公民館長、千曲病院事務長井出武彦氏等見える。

土壙1、深さ約80cm、磨石状川原石と共に、土器の蓋が出土した。浅い皿の底のような凹面をもつ粘土円板で、内面は黒色で光沢があり、外面には2個の小さなつまみのような貼布突起が、対応してつけられ、中央にひも通しのような孔が貫通している。つまみの1つは欠損している。骨の細粒が数十粒でる。覆土中からは縄文中期土器片多数(約5kg以上)、

土壙2、底に鉄平石が敷いてある。

○12月10日(金)晴

土壙3・4と炉址を調査する。

新海教育長(午前)、町会議員(午後)現状視察。

高見沢万平、高見沢良夫両氏夕方手伝ってくれる。文化財調査委員木内和太郎氏視察。沖浦南佐久郡誌編集委員長終日調査に参加する。

土壙3、底に縄文後期土器とこれに重ねて川原石が置いてある。

土壙4、底に鉄平石を敷いて、その上に大きな平形、長形、円形の川原石を積み上げている。

炉、炉石は東北面して立てられ、焼土は深さ約10cm、真赤に堆積している。長期間使用の跡をとどめている。

作業は暗くなるまでつづけられ、ようやく掘り上げて終了する。

○昭和58年8月5日(火)晴

三本木団地千曲病院医師住宅建設に伴う緊急発掘調査打合せ 10時

新海教育長、篠原文化財調査委員長、郷道哲章県文化課指導主事、井出武彦千曲病院事務長、島田恵子、井出正義

11時から現地打ち合わせ会。

○10日～12日表土30cmをブルドーザーにて焼土する。

○13日～16日発掘調査。

発掘資材必要一覧表を島田より教育長に提出する。

○8月10日(水)晴

午後雷雨2回あるも、すぐ止んで作業に支障はほとんどない。

遺跡名は「佐久西小学校裏遺跡」とする。

調査面積 東西16m、南北12m、前回調査地区の南に接する地区。

ショベルカーにて焼土しながら、遺構確認の作業をすすめる。

西壁よりに焼土と土器底部があり、炉址と思われるが、胡桃の大木の抜根穴と、ごみ捨て場が掘られて、遺構が破壊されてしまっていて調査不可能である。

中央北よりに長さ65cmの長楕円形の石が南北方向に置かれ、これを中心に土壙がつくられている。石の周囲には土器片が多い。(土壙7)

北壁ぞいに東西に長い溝状の落ちこみがある。巾50～80cm、鉄平石や土器片を多く出土す。

中央部南東よりには、胡桃の大木を抜根した大穴(直径3m)が二つあり、また桑の榎え溝と思われる巾40cmの溝が、60cm間隔に数条あり遺構は検出されない。

午後、破壊された炉址の南に土壙(D6)を

検出する。

○ 8月11日(木) 晴午後曇

遺構番号は、前回調査の1~4号につづいて、
D5からとする。

北東隅に土壌を検出。(D5)

西南隅に伏襲らしい土器をもつ住居址と思わ
れる遺構を認める。(J1)

○ 8月12日(金) 休みとする。

○ 8月13日(土) 晴

午前、病院事務長井出氏より、午後木内和太
郎氏よりアイスクリームをいただく。

遺構掘り下げにかかる。

西南隅の住居址(J1)の中央部に炉址(竪
穴炉)と、床面に伏せた状態の土器を検出。

D6 浅い。

D7 倒れている石の下に焼土がみえている。

D8 円形で浅い。

溝、東にいくほど深くなる。東端は土壌らし
く思われる。凹石や丸石が溝中より出土。

○ 8月14日(日) 晴夕方雨 台風接近。

遺構掘り下げ。

D5、大きな石が重なり合っている。

J1 床面に、底部を欠失した縄文中期末の
土器を確認。この住居址の年代決定資料となる。

○ 8月15日(月) 雨、台風上陸。

○ 8月16日(火) 雨、曇 台風接近。

D5周囲の廃土と根切り。10時終了。21日に
最終的まとめをすることにする。

○ 8月21日 くもり時々雨

遺構の実測。

○ 8月22日 雨、曇

写真撮影、J1の炉を掘り下げ調査する。

○ 8月23日

資材撤収 教育長

○ 8月25日~8月30日

土器洗い。

○ 12月19日~12月27日

遺物註記、拓本、遺構実測図整理トレース。

遺物実測、トレース。

○ 12月28日~1月9日

自宅にて原稿執筆。

○ 1月10日~1月11日

図版作成、石器トレース。

○ 1月12日~1月30日

原稿清書、総編集。

○ 2月~3月

校正、発刊

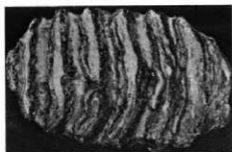
(井出 正義)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

佐久平は標高平均約700m・南北20km・東西10kmの長菱形な高原盆地で、その中心部を千曲川が南から北に向って貫流している。東部は関東山地の西北端部にあたる佐久山塊が群馬・長野県境から千曲川沿岸まで迫り、高い尾根と深い谷の浸蝕の進んだ満壮年期の地形を作り、その各地に火成活動の跡も残している。深成岩（花崗岩・閃緑岩・虹紋岩）、噴出岩（安山岩・流紋岩等）の露出も所々に見られ基盤は中古生層によって構成されている。西部には日本中部地溝帯（ホッサマグナ）中に噴出した八ヶ岳・立科連峰が諏訪・佐久郡界を作り、その初期の火山活動噴出物（火山集塊岩・泥流）は佐久平の縁辺部まで迫り、部分的には千曲川流路を一時的に堰き止め淡水湖を形成した個所の跡もある。従って佐久平の周辺山麓地帯には、到る所洪積段丘が発達しており中心部千曲川流域には浸蝕堆積の沖積平地が広がっている。

この長菱形の佐久平の長い対角線の南端部に当る所に佐久西小学校裏遺跡がある。千曲川沿岸



の佐久町高野町地区は、標高755m内外の沖積地市街住宅区以外は全て水田地帯で、千曲川上流地帯としては東西市の広い佐久平最南端部で古墳・水田稲作創始の南限と考えられているところでもある。

本遺跡は、その西側高さ20m内外の高位段丘、佐久平周辺一帯に分布する洪積段丘上に位置し、最下部層は北八ヶ岳火山初期の噴出物である凝灰質角礫岩の厚層でその上部には千曲川及びその支流北沢川の河岸堆積砂礫層が3～5mの厚さに重なり、最上部に2m内外のローム層に被われており今回発掘地は標高776.8mである。付近は現在新興住宅団地“三本木団地”となっており、20年以前は大部分桑畑であり、縄文土器破片、石器の表面採集の好適地であった。佐久水道の上水道敷設に伴って開発されたものである。今回もその団地内西南部に住宅建設基礎工事によって発見され調査したもので、調査地付近では表土は褐色耕作20cm、その下黄褐色ローム58cm、その下部は黄色ローム層が厚く堆積しており、いずれも粘性の頗る強いもの



八千穂村中畑出土象歯化石

であった。

この段丘は東方千曲川右岸海瀬秋葉山から花岡・八千穂村崎田・穴原と続き、抜井川沿岸では畑々中・館、北部では入沢の月夜平等に同一段丘堆積物が認められ、成因層序が殆ど同一のもので洪積期には連続していたものと考えられる。八千穂村中畑十二明神の佐口部落へ通ずる道路ぎわのこの地層の中部層中から大正14年9月19日(1925)砂利採掘工事中に旧象 *Elephas torogont-hrij* の第1真臼歯(上顎右側)1個と他に象歯破片1個が発見されたことが地学雑誌472号昭和3年6月号に報告されている。これによっても洪積末期の間氷期の堆積物であることが実証されている。これらの段丘堆積層上の表面が縄文人の生活の舞台であったことを物語る遺跡が佐久平周辺には多く分布している。佐久町教育委員会刊1979年宮の本遺跡調査報告書所載のこの付近の地質図を参照されたい。

(白倉 盛男)

第2節 考古学的及び歴史的環境

佐久西小学校付近は、「南佐久郡の考古学的調査」に於て、八幡一郎氏が「遺物の種類、數量に富む点に於ては、和田上と並び、蓋し本部の双壁ならん」と書いているように、古くから佐久郡屈指の大遺跡として知られ、縄文・弥生・古墳各時代にわたるたくさんの貴重な遺物が耕作や表面採集によって発見されている。小学校建設工事に當っては、おびただしい遺物が出土し、御真影奉安殿築造の際には数石住居址が掘り起こされた。戦後はこの台地の北西部に開田工事が行われ、東北部には三本木団地が造成された。今回発掘調査されたのは、わずかに台地南東端のさいごに残った一角である。

この台地上には、もと10数基の古墳があったといわれ、埴輪の破片も発見されていることが、「南佐久郡の考古学的調査」に記されている。現在これらはみな失われ、北沢の城陰に塚畑古墳一基が残存しているだけである。しかし、ここが佐久郡に於ける古墳立地の南限であることは明らかであって、弥生時代の稲作もまたここを限界とするものと考えられる。

鎌倉時代末には、大徳寺文書に「鷹野郷八百貫文」と記されているように、この台地を中心として千曲川から北沢川の流域にわたって伴野庄有数の大郷村が成立していたのである。

今回発掘調査した部分の主要な遺構は、縄文時代後期の土墳墓であるが、しかし、それは前代の縄文中期の遺跡の中にあとからつくられたものである。昭和53年に発掘調査したこの台地上の北端の宮の本遺跡も縄文後期の数石住居址を中心とする配石遺構があり、戦前御真影奉安殿の敷地とされたのも数石住居址であった。

この台地付近には、西方北沢川にそって縄文から平安時代にわたる10数ヶ所の遺跡が点在している。この台地上南方2kmの八千穂村上野の月夜平も縄文後期の遺跡である。本遺跡の千曲川の対岸には支流抜井川にそって、その段丘上にたくさんの遺跡が分布している。そのうち縄文後期



第2図 佐久西小学校裏遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)

の遺跡としては館遺跡がすぐれている。余地の宮向遺跡や中谷遺跡も縄文後期である。本遺跡から東方約7kmの余地の板石山では鉄平石（輝石安山岩）を産出する。本遺跡で用いられている鉄平石もここから運ばれたものと考えられる。

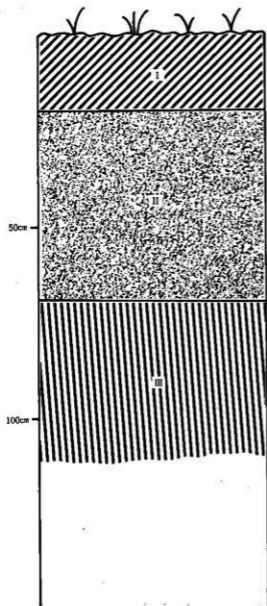
また、本遺跡に関わる遺物として最も注目されるのは、遺跡段丘下の西側にU字状に開けた水田地帯の中央に北沢川が流れ、その右岸水田の畦に立つ大石棒である。地上部の高さ1.5m、最大径25cmを測る。「南佐久郡誌」には2.5m程あろうと記されている。輝石安山岩を素材としており、日本一の大型石棒である。現在地より30m程上に湧水があり、この湧水付近に横転していたとの事である。同じように湧水地帯に横転していた磨製の150cmを測る大石棒が、本遺跡から5キロ下った千曲川右岸入沢の月夜平遺跡から出土している。両遺跡とも縄文中期から後期にかけての貴重な遺物が最も多く採集されており、同時期に成立していた遺跡であると考えられる。

(井出 正義)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代			備考
				縄	弥	古	
1	佐久西小学校裏	佐久町高野町吹上	台地	○	○	○	昭57.12月 同58.8 発掘調査
2	宮の本	〃 〃 宮本	〃	○	○	○	昭和53.11月発掘調査
3	小山寺窪	〃 〃 寺窪	〃	○	○	○	小江山津金寺廃寺跡、宝篋印塔、五輪塔、縄文前期(該遺)土器、須恵
4	与市窪	〃 宿岩与市窪	〃	○			
5	塚畑古墳	〃 高野町城除	〃			○	現存佐久地方南限の古墳
6	北沢	〃 〃 北沢	〃	○	○	○	口縁部緑釉糸切里出土
7	北沢大石棒	〃 〃 〃	〃	○			日本一の巨大石棒
8	雁明	〃 〃 雁明	〃	○		○	
9	施餓鬼畑	〃 上区施餓鬼田	〃	○		○	
10	下影	〃 〃 下影	〃	○		○	
11	千手院地内	〃 平林	〃	○	○	○	千手院地内から宮上、木伏久保地帯にわたる
12	曾原	〃 曾原	〃	○		○	
13	丸井戸	〃 畑中丸井戸	〃			○	土師、須恵、灰釉、豊富な湧水
14	マギ	〃 海瀬 マギ	〃	○			町営グラウンド敷地を含む。
15	下原	〃 〃 下原	〃	○			
16	上原	〃 〃 上原	〃	○		○	
17	中原	〃 〃 中原	〃	○	○	○	弥生中期壺2を出土
18	月夜原	白田町入沢月夜平	〃	○	○	○	佐久町北方に接する大遺跡
19	月夜平	八千穂村大窪上野平	〃	○	○	○	加曾利E、敷石住居址、石皿、磨石

第3章 層 序



第3図 層序模式図

第I層 (暗褐色土)

層厚20cmの畑の耕作土である。縄文中期の遺物を多量に包含しており、表土の少なから耕作の影響により、すでに縄文中期の遺構は大半が破壊されていた。

第II層 (茶褐色土)

粒子が細かく粘性の強いローム層で固い。層厚は50cmでこの層の直上に埴が存在し、焼土の堆積がみられた。また、縄文中期の土壌もII層直下まで掘りこまれていたものは、わずかにその姿をとどめている状態であった。

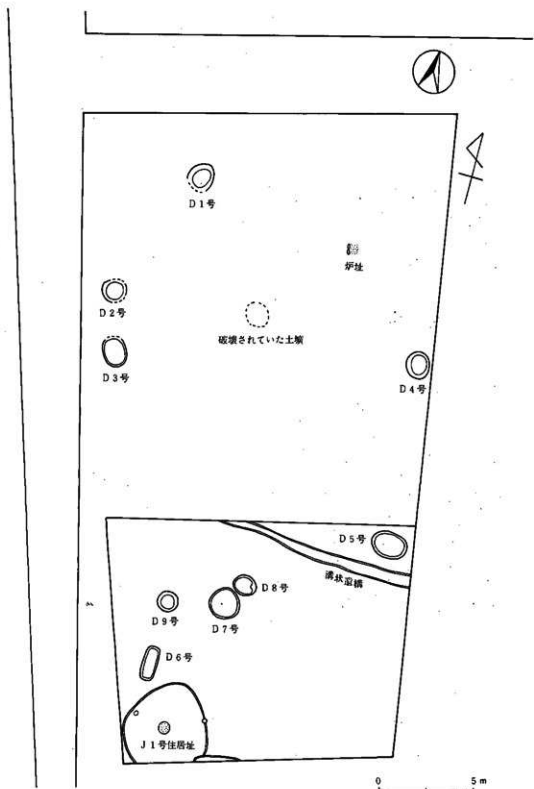
縄文後期の遺構は、このII層を掘りこんで構築されている。

第III層 (黄綠色土)

黄色に緑色がかかった非常に粘性の強いひきしまった層で、かなりの層厚である。

縄文後期の遺構は、この層20～40cm前後まで掘りこまれていた。礫の混入はほとんどみられない。

(島田 恵子)



第4図 検出遺構全体図

第4章 遺構と遺物

1 住居址

1) J1号住居址

遺構(第5・6図)

本住居址は、調査区の東南端より検出された。桑の大木が存在したことにより、調査区外へ延びていた住居址の完掘を断念せざるを得なく、東壁が検出できなかった。地形も住居址面あたりから東側へ緩傾斜しており、耕作土を取り除いた部分ですでに住居址の残存は床面に近い状態であった。

平面プランは、460cm×460cmと推測され、不整な方形を呈する住居址であると推される。壁高は、6~10cmと浅く、炉を中心とした主軸方位はN-43°-Wを示す。

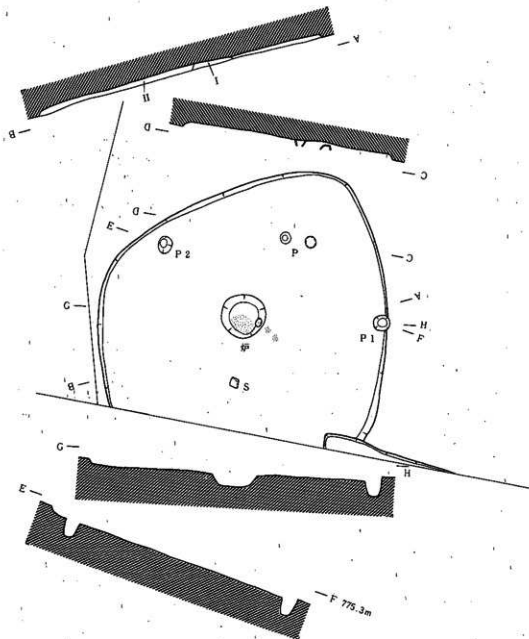
覆土は、ソフトな褐色土のI層が残存したのみであった。床面は平坦でやや堅緻な面がみられた。柱穴は2個確認した。P₁は北壁中に存在し、26×23cm、深さ30cm、P₂は26×23cm、深さ26cmを測る。

炉は、住居址の西側寄りではあるが、ほぼ中央に位置する。66×70cm、深さ20cmを測る小型の円形竪穴炉で、南東側の炉底面の約半分にはバリバリの固い焼土が10cmの厚さに堆積していた。また、炉の東側コーナー立ち上り際に、第21図1に図示した磨石が存在していた。さらに同地点の炉際の床面には焼土が部分的に散布しており、床面はこの部分のみ非常に固かった。第5図の住居址実測図に図示した如く北東コーナーには壁を切って、他の遺構が存在している。軟弱ではあったがおそらく住居址であろう。

以上のように住居址は、耕作段階ですでにその大部分が削り取られており、幸いに本住居址がようやくその姿をとどめていたのである。わずかに15m西側は、炉焼土を残したのみで住居址のプランはほとんど判明でき得ない状態であった。

遺物(第7・18図)

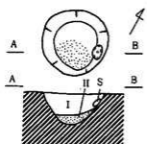
遺物は、第7図の拓影に図示した破片と、床面直上で出土した第18図1・2が主な出土土器である。1は、小形のキャリパー型深鉢で胴下部を欠失しており、床面に伏せた状態で存在していた。器形は、波状口縁を有し胴中央にくびれを持つ。文様は、口縁部と胴部文とがこのくびれを境として区別されている。口縁部は凹線と隆線による渦巻文および縄文が施文された区画文とから成る。この深鉢の口縁部文様は、加曾利E式と唐草文系とが伯仲した感を呈する。しかし、器形的には曾利式の影響も多分に入っている。焼成は固く、色調は黒褐色を呈す。内外面ともに黒味がかって焼成されている。長石、石英粒が目立つ。



I層 (褐色土) 粒子細く粘性中、やわらかくバミス少量
 II層 (暗褐色土) 粒子細く粘性強、炭土少量混

0 2m

第5図 J1号住居址実測図(1:60)



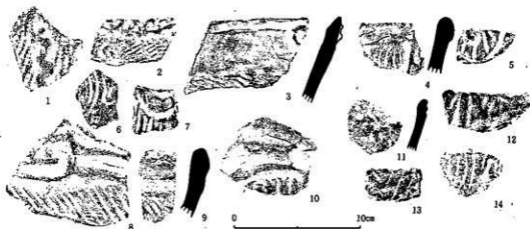
I層(褐色土)焼土、炭化粒子含
II層(赤色土)焼土

第6図 J1号住居址炉実測図
(1:40)

2は、深鉢の底部片であるが、底径11cmを測りかなり大形の深鉢である。焼成は軟弱で褐色を呈し、摩滅気味である。

拓影に図示した破片は覆土中からの出土が多い。1は、貼り付けの蛇行懸垂文を有す。2も同様にわずかに蛇行懸垂文が唄られるが、横位にもCの字状の貼り付け文が施されている。1・2共に地文は縄文である。

3は、焼成固く黒褐色を呈す。口縁部に一条の凹線と、隆線による渦巻文を有す。地文はやはり縄文である。8・9も地文は縄文を有し、隆線と凹線の渦巻文を持つ8と口縁部に一条の凹線をもつ9とがある。4～7、10、12～14は篋描沈線が主体を成す。11は、器肉の薄い口縁部片で2列の小さな円形刺突文が施されている。摩滅



第7図 J1号住居址出土土器拓影(1:3)

が著しく本住居址に伴う土器片か判別困難である。

石器は、前述した炉内出土の磨石(第21図1)と横刃型石器(同7)の2点が出土している。

本住居址は、以上の出土土器から曾利Ⅳ式期に比定されると判断した。

(島田 恵子)

2 土 壤

1) D 1号土塙 (第8図)

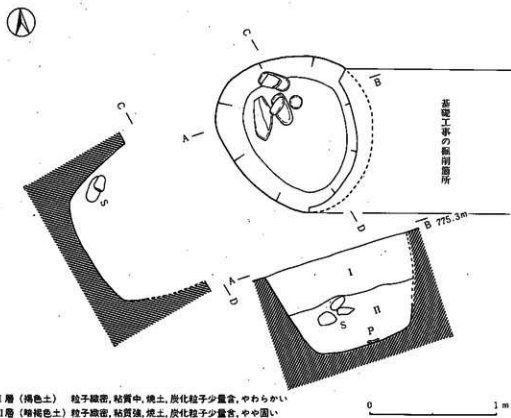
本遺構は、第1地区の基礎工事の掘溝の北西部より検出された。

平面プランは、120cm×120cmを測り南にすばまった不整形形を呈する。主軸方位はN-5°-Eを示す。確認面からの深さは70cm~76cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。

覆土は2層によって形成され褐色土を基調とした粘性の強い土で、炭化・焼土粒子を少量混入していた。

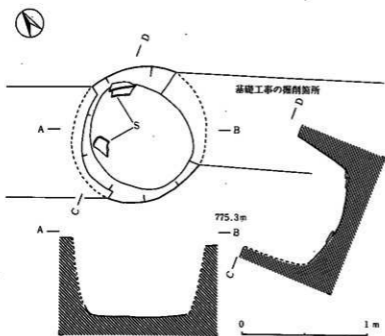
遺物は、覆土中より縄文中期の土器片が多く、打石斧1、横型石匙1、敲石1が出土した。また、底面中央に直径9cmの凹面鏡状の弯曲をもつ円形の土器の蓋が置かれ、この付近より骨片の細粒が数十粒検出された。さらに、約25cm上がって北西寄りに、長径15~35cmの流紋岩質の長円形の河原石4個と縦長板状の玄武岩1が一部重ねて置かれている。流紋岩の河原石の一つは熱せられて赤色を呈している。破片1は、かなり内部まで赤く焼けている様相を示している。

さらに、20cm上部に鉄平石が一枚平に置かれ、下部の埋設部分との区切りを示すかの状態であ



I層 (褐色土) 粒子緻密, 粘質中, 焼土, 炭化粒子少量含, やわらかい
II層 (暗褐色土) 粒子緻密, 粘質強, 焼土, 炭化粒子少量含, やや固い

第8図 D 1号土塙実測図 (1:30)



第9図 D2号土壇実測図(1:30)

されたものようである。

本遺構は、壺状土器から縄文後期初頭に比定されよう。また、骨片の発見からその性格は土壇基であった可能性が高い。

(井出 正義)

2) D2号土壇(第9図)

本遺構は、調査区の西側D3号土壇と隣接して検出された。しかし、住宅建設基礎工事掘削に依り、発見された際にはすでに遺構中央は東西を重機に依り削り取られていた。

平面プランは、160cm×160cmを測りほぼ円形である事が底面の形状から推測される。深さは確認より47cm～60cmを測り、壁は垂直に立ち上る。主軸方位はN-36°-Eを示す。

底面東側に6cm×10cmの鉄平石があり、さらに北側北壁際には、13cm×18cmの長方形の鉄平石と6cm×12cmの三角形の鉄平石が重なった状態で出土した。これらの鉄平石片は、新しい欠け口が認められないことから、意図的に小さい石片を選んで使用したものと思われる。その他にも石が存在したと考えられるが重機に取り去られた可能性がある。

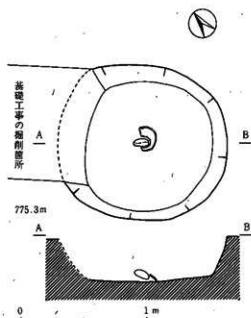
遺物は、黒曜石片、土器片が少量と磨石1点が出土した。中期と思われる細片もあったが、共に覆土中からの出土であることから時期を決定する所見に欠けるが、遺構の様相等からD1号～D5号土壇と、時期・性格は同類であると思われる。

(三石 延雄)

った。

壺状土器は、手づくねで内面は黒色の光沢のある漆状の塗料が塗られている。外面は淡い褐色で外縁部に相対して小さな把手状に粘土が貼付され、ひも通し用と思われる穴が貫通している。一方のひも通し孔は欠損しているが、その痕跡ははっきり残っている。第18図4に図示した。

なお、南壁立上り際には焼土が50cm程の範囲に散布していた。バリバリの固い焼土もあり縄文中期の炉跡が、本土壇構築の際にこわ



第10図 D3号土墳実測図(1:30)

3) D3号土墳(第10図)

本土墳は、D2号土墳と隣接した南東側に検出された。西側壁が建築基礎工事により掘削されてしまったが、平面プランは、南北115cm、東西135cmを測る。形状は楕円形を呈し、主軸方位はN-38°-Eを示す。

深さは30~35cmを測り、底面は平坦で壁はなだらかに立ち上る。覆土は褐色を呈し、下部には炭化粒子がところどころ集中的に混在している。人為的埋土である様相を呈していた。

遺物は、覆土上部より縄文中期土器片の縄文を施した破片9点、唐草文系の破片10点、その他無文土器片20点が出土した。また、砂質粘板岩を素材とする横型石甃の破片が2点出土している。

さらに、覆土下部からは縄文後期の細片6点が出土した。文様は縄文と沈線が施文されている。そして、土墳内中央底面には黒色を塗彩し、その上面にとところどころ朱漆を塗布した壺形土器と思われる胴上部~頸部にかけての破片が、13cm×6cm大の輝石安山岩を相いやくような形でセットになって出土した。この甃も表面全体が黒色塗彩されており、全体になめらかでよく磨かれている。第18図3に土器を、第21図5に甃を図示した。土器はポロポロで約半周を回っていたが $\frac{1}{2}$ の残存となってしまった。2条の微隆帯が回っているのみで無文である。しかし、朱と黒の塗彩は特別な土器であったと思われる。

本土墳も、覆土上部から縄文中期の破片が多量に出土し、下部および底面からは縄文後期の細片が主に出土している。このことは、中期の遺構を切って本土墳が構築されていることを顕著に物語っているといえよう。本遺構もまた、D1・D2号土墳と同様な性格をもつ遺構であると思われる。しかし、規模・形態は類似しているが、墳内の様相が異なった独特の形状を呈しており興味深い。墓墳としての性格がより濃くなった感を呈する。

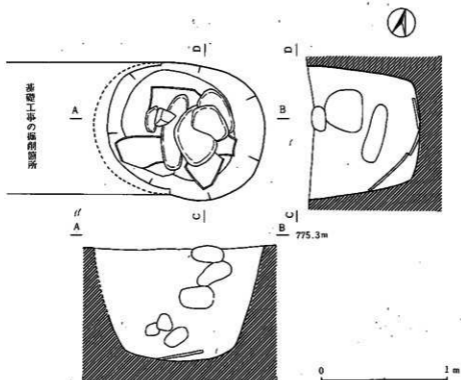
(島田 志子)

4) D4号土墳(第11図)

本遺構は、第一区の北東隅に一部が基礎工事の掘溝にかかって検出された。

平面プランは、長径135cm、短径105cmのやや西にすばまった楕円形を呈する。確認面の深さは75cm~88cmを測り、壁は垂直に立ち上る。主軸方位はN-15°-Wを示す。

覆土は、粘性の強い褐色土に覆われやや固くひきしまっていた。底面および壁をとり囲むよう



第11図 D4号土塙実測図(1:30)

に、長さ45cm、巾30~50cm大の鉄平石が配石されている。その上に大きさ15~20cmの山石が二つ重ねて置かれ、その上部に径25~30cmの大きなきれいな安山岩の円形または長円形の河原石が、横・縦・横と重ねて積まれている。鉄平石は箱形に組まれていたものと思われるが、掘削された西壁の部分のみ鉄平石が欠除していた。この部分は上部から攪乱も入りこんでいたため、抜きとられたものと考えられる。

遺物は、第22図1の横型石匙、2の上下端を欠損した打製石斧、3の完形品の3点が出土し、土器の出土は皆無であった。

本遺構も、墓墳であると思われる。

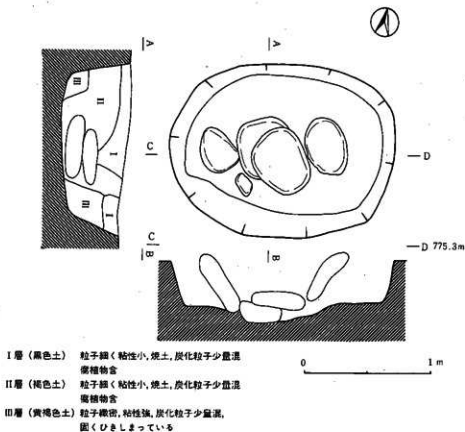
(井出 正義)

5) D5号土塙(第12図)

この遺構は、第二地区の東北隅に位置し、D4号土塙の南方17mに位置し、溝状遺構の東端のすぐ北側に隣接している。

平面プランは、長径178cm、短径130cmの長方形で、主軸方位はN-12°-Wを示す。確認面からの深さは34~55cmを測り、壁は垂直に立ち上っている。

覆土は3層から成り、I・II層共に焼土、炭化粒子を少量混入し、腐植物を含んでいた。III層は粘性が強く固くひきしまった層で炭化粒子を少量含んでいる。人為的な埋土である。底面は、東西面の中央が凹んでおり、両端が10cm程高く上っている。



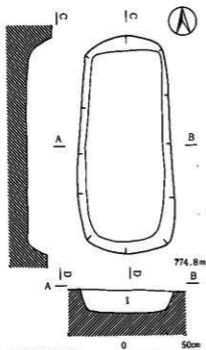
第12図 D5号土坑実測図(1:30)

底面中央に直径45cmの丸をもった平らな川原石を置き、その上に直径45cmの同じような平らの川原石を半分下の川原石に重ねるようにして置いている。この二つの平石の東西に直径45cmと50cmの円くて平らな川原石を立てて配石している。これを横から見れば、座椅子状とも箱式石棺状ともとれる。石質はいずれも緻密な質の安山岩の円くて平らな、きれいな石を選んで千曲川原から運んできたものと思われる。

覆土中には、第22図4・5・6に図示した打製石斧3点と、縄文後期注口土器の胴下部と思われる破片と鉄平石片が出土した。上層には縄文中期の土器片があって、この土坑が構築されたのは、縄文後期中期の遺跡の中に掘りこまれたものであると思われる。

本土墳の石組の状況は、遺体を石の下に封じこめたものではなく、むしろこの配石の上に丁寧に埋葬されたものであることを想像させる。

(井出 正義)



1層 (濃黒色土)
 粒子細く粘性小、ローム粒子
 2mm次の小石粒少量
 やわらかい

第13図 D6号土墳実測図 (1:30)

6) D6号土墳 (第13図)

本土墳は、J1号住居の南西壁に隣接した位置に検出された。プラン確認時より、サクサクしたソフトな土層で黒色を呈していたため、容易に確認された。

平面プランは、73cm×170cmを測り長方形を呈する。主軸方位はほぼ北を示す。

覆土はソフトな黒色土の一層から成り、深さは、15cm～20cmと浅い。壁はしっかりとしており、ほぼ垂直に立ち上る。底面は平坦である。

覆土からは、縄文中期の無文土器片6点と縄文が施文された破片1点が出土したのみであった。

本調査区より検出された遺構の中では、このD6号土墳の覆土のみ色調が漆黒色で濃く、形態も異なるため、ずっと新しい時期の遺構であると考えられるが、時期決定をする所見に乏しく、判明でき得ない。しかし、規模・形状から墓墳である可能性は強いと思われる。

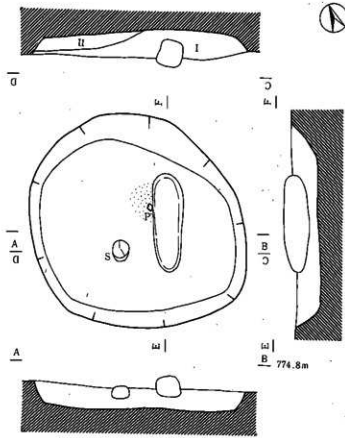
(島田 恵子)

7) D7号土墳 (第14図)

本土墳は、D8号土墳と北西壁を接する位置に検出された。耕作土を削平した時点ですでに立石状の礎が顔を出していたことと、この上部にくるみの木が存在しており、その根が張りこんでいて破壊が著しく、立石の存在によりようやくプランの確認が出来たという状況であった。

平面プランは、160cm×170cmを測り、東に若干張り出した不整形形を呈する。主軸方位は、N-23°-Eを示す。深さは13cm～20cmを測り、底面は平坦で壁はなだらかな立ち上りをみせている。

覆土は、褐色土を基調とした2層によって形成され、I層はフカフカのソフトな層で、焼土、炭化粒子を混入していた。II層は、南北側に部分的ではあるが、非常に堅緻な個所がみられた。



I層 (褐色土) 粒子細く粘性中, ソフトな層, 焼土, 炭化粒子少量含
 II層 (明褐色土) 粒子緻密, 粘性強, ソフトな層, 焼土, 炭化粒子微量含

0 1 m

第14図 D7号土壇実測図 (1:30)

また、立石の北側には焼土が集中して散布しており、祭祀的な様相を呈している。

出土遺物は、73cm×20cm大の流紋岩を素材とした立石状の礎と石棒を輪切りにしたような平面の丸い直径13cm大の流紋岩が土壇内に置かれていた。立石は南北に横転しており、丸石はこれより20cm西側に並んでいた。

土器は、焼土散布の上面に6cm大の鉢型土器の口縁部片があり、内面は赤色塗彩されている。

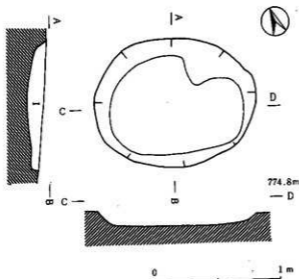
この他、覆土内より60点の細片が出土したが、そのほとんどが無文部片である。わずかに、蛇行懸垂文2点、縄文が施文された2点が見出された。

(高田 恵子)

8) D8号土壇

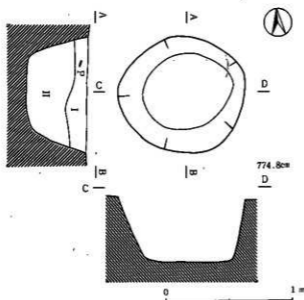
本遺構は、D7号土壇と東南壁コーナーが接する地点に検出された。本土壇も、D7号と同様、上部に存在したくみの木に破壊され、わずか底面が残存したのみで、極めて軟弱な遺構であった。

平面プランは、97cm×128cmを測る楕円形を呈し、主軸方位は、N-18°-Eを示す。壁高は6



I層 (褐色土)
 粒子緻密, 粘性強, 炭化粒子
 パミス少量混

第15図 D 8号土墳実測図 (1:30)



I層 (褐色土)
 粒子緻密, 粘性中, 焼土, 炭化粒子
 少量混, やわらかい

II層 (黄褐色土)
 粒子緻密, 粘性強, ローム粒子
 多量混

第16図 D 9号土墳実測図 (1:30)

cm~13cmと浅く、覆土は褐色土の1層が残存し、炭化粒子を少量混入していた。

遺物は、12点の土器細片と打製石斧の小さな破片1点が覆土中より混在して出土した。

これ等の所見のみでは、本土墳の性格、時期の決定は難しい。しかし、土器片、覆土、様相等から中期後半には比定できよう。

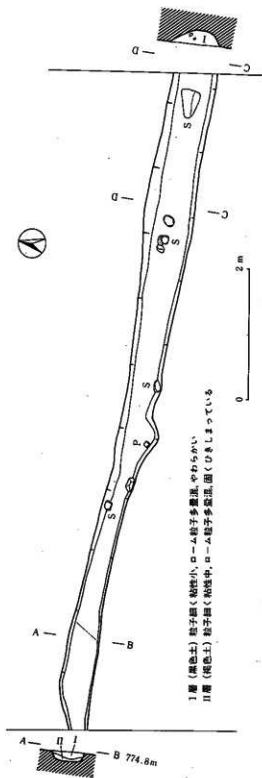
(高田 恵子)

9) D 9号土墳 (第16図)

本土墳は、D 6号、D 7号の南西側中間部に位置する。

平面プランは、90cm×100cmを測りほぼ円形を呈する。主軸方位は、N-3°-Eを示す。深さは、42~50cmを測り、壁は垂直に近い状態で立ち上っている。覆土は、褐色土を基調とした2層から成り、地山とあまり変化のない土層のため、プラン確認には困難をきたした。I層は、炭化・焼土粒子が少量混入していた。II層は黄褐色土で地山と変りない土であったが、やわらかく、サクサクしており、構築時に掘った土を埋土した様相を呈していた。底面は平坦である。

出土遺物は覆土中より黒曜石片2点、土器片35点が混在して出土した。土器片は、縄文を施文した破片4点、沈線文2点、蛇行懸垂文1点があり、他は全て無文であった。また、三角形の面を持つ磨石1点も出土している。



第17図 M1号溝状遺構実測図 (1:60)

これ等の遺物から本土墳の時期は、縄文中期後半の土墳と判断される。

(島田 恵子)

3 溝状遺構 (第17図)

本遺構は、調査区の西南側隣近より北東側にやや斜めに横断する形で検出された。

平面プランは、巾約50cm~80cm、深さは確認面より西側において約10cm、東側において25cmを測る。検出された時点の溝の長さは約10mを測る。

覆土は、2層に分かれ、I層はややあかるい黒色土で、II層は褐色を呈し、固くひきしまっていた。

本遺構は完掘に至らなかったが、西北および東北側に曲線を描いているものと思われるが、地形は東南に傾斜し、東側に約1mの段差があり、宅地造成の際に破壊されたと考えられる。

遺構内東端に、45cm×25cm大の安山岩1が存在しており、その他にも10cm前後の礫が6個散見した。鉄平石は15cmを測るものが1枚見られる。この内、第21図2に磨石を図示した。

土器片は、縄文中期後半の曾利II・III式期に比定されるものが、遺構中央の張り出し部分から出土した。これは中期の土墳を切って、この溝が構築されわずかに土壌の一部が残ったものと考えられる。溝は通常長いものであり、その一部分の調査によって性格を判断する事は困難である。しかし、本遺構は、砂の痕跡もなく水路的性格のもので無い事は明らかで

ある。D 1号～D 5品土壇を取り囲むように本遺構は存在していることから、あるいは後期土壇墓群の境を示す溝であるかも想定される。

(三石 延雄)

4 調査区域内出土土器 (第18・19・20図)

各遺構出土の土器を第18図に図示したが、個々の説明は各遺構の章でおこなっているので、ここでは19・20図の拓影土器について若干の説明を加えてみたい。

第19図1・2は、隆帯の波状文および1にわずかに残っている蛇行懸垂文と地文に縄文が施文されている。曾利Ⅱ式期に多く見られる施文である。また、隆帯の蛇行懸垂文は唐草文系Ⅱ式期に多い。

3～40、42・43は、縄文と竇描沈線文の土器片を一括した。口縁部は無文が多く、曾利式に特に多い。口縁部の小渦巻文が見られない。このことから、曾利式と加曾利E式の縄文系の分離は破片のみでは区別不可能である。41は、アングイン状圧痕の底部片である。

第20図の1～39は竇描沈線文を主体に一括した。1は鉢型で3と同様、楕円状の刺突文が帯状につづく。口縁に小渦巻を有す。9・12・13・15・16があり、前述したように曾利式に区別される。また、28・30・32・33・34は、八の字文および34の大胆な竇描沈線文は、八ヶ岳山麓で発達した曾利V式期の文様である。その他の文様は、くずれた感を呈するものが多く、唐草文系の影響を受けた綾杉文の明確な文様が見当らない。従ってこれ等は曾利式に位置付けた方が妥当と思われる。40・41は、羽毛目状の条線文である。

42～46は、縄文後期の土器片を一括した。42は、浅い沈線文の胴部片である。称名寺式的要素の強い文様であるが、他の土器片から堀之内Ⅰ式とすべきかも知れないが、破片なので区分は難しい。43・44・45も堀之内式に区分されよう。これ等はⅡ式期に入るものと考えられるが、細片なので速断はできない。46は、黒色を呈し、焼成は固く縄文後期に入る土器であると思われるが、所属は不明確である。

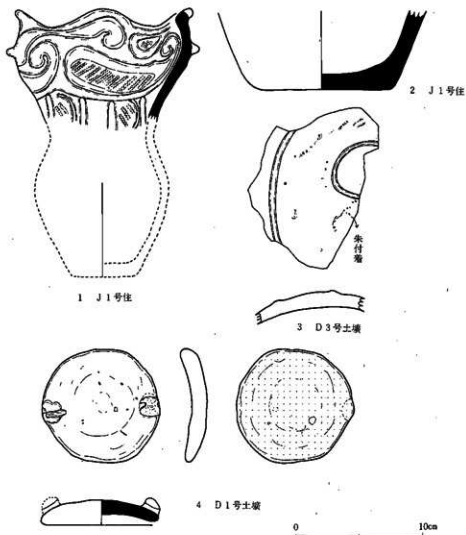
(島田 恵子)

5 石器 (第21図1～6)

磨石 (第21・22図)

1は、長円形で表面はゆるやかにふくらみ、裏面は平坦面をもつ。裏面はほぼ中央部に凹みをもつが、加工を加えたものではない。裏面の平坦面は磨られて滑らかになっている。裏面や端部も磨られている。輝石安山岩を用い、全面粒子が粗く、多孔質である。J 1号住居址の炉内より出土。

2は、楕円形を呈し、厚くて表裏両面とも曲線はゆるやかで、ほぼ全面が磨られている。表面中央部には浅い凹みがあるが自然面である。溝状遺構から出土。素材は輝石安山岩を用いている。



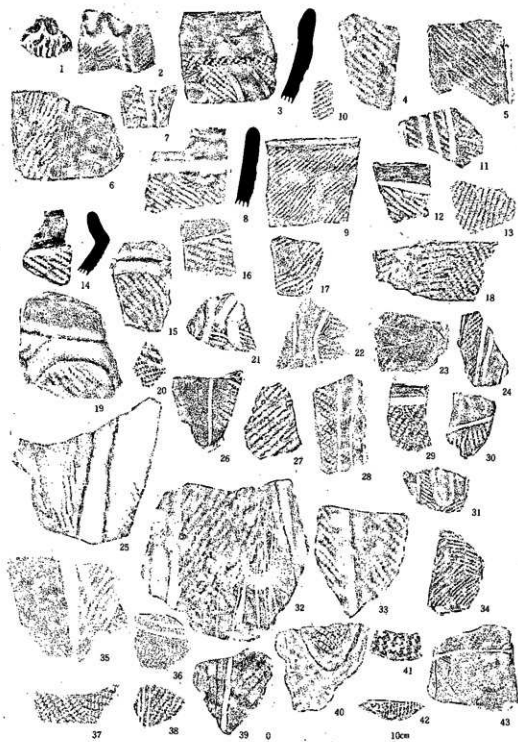
第18図 遺構内出土土器実測図(1:30)

やはり全面粒子が粗く多孔質である。

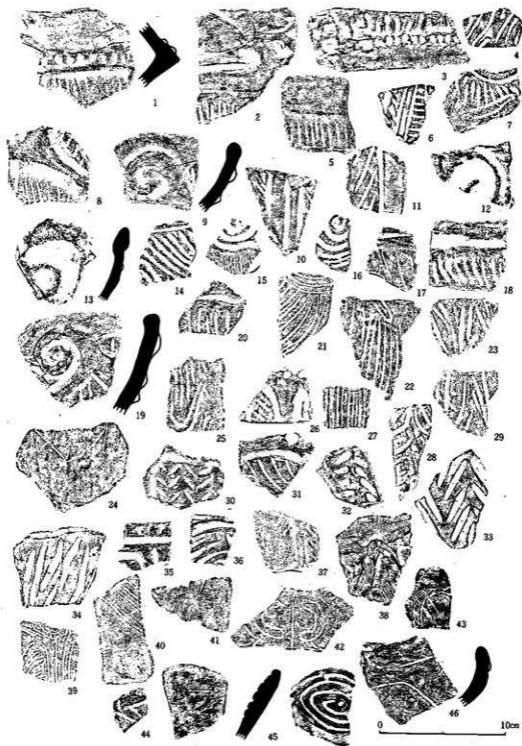
5は、花崗岩製で、縦長三角形のおにぎり状を呈している。底面は中央に浅い凹みがあり、平坦面はよく磨られている。上方の両側面ともによく磨られ、平端面に縦長の擦痕も認められる。両端部には敲痕もある。D9号土壇から出土。

6は、やや扁平な円碟であるが全面が磨られている。D2号土壇より出土。

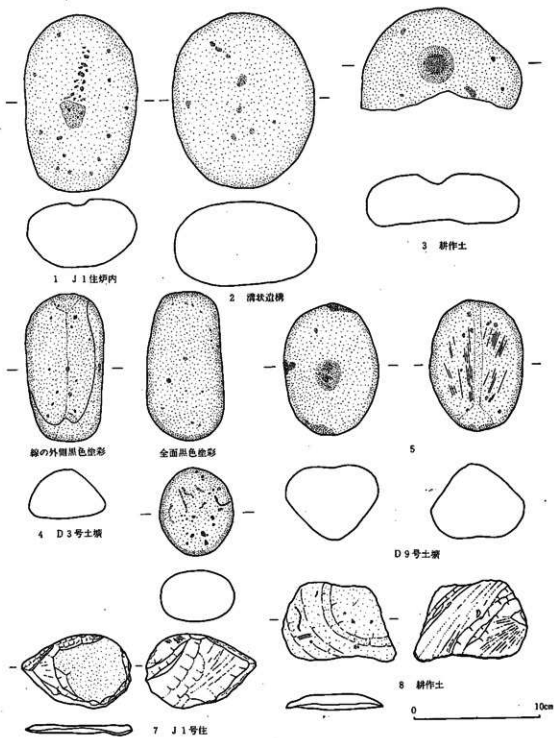
4は、三角墳に丸味を持たせるような形で、質の緻密な輝石安山岩でつくられている。裏面は巾が広く、平坦で安定感がある。表面は中央の高さ約4cmの稜をはさんで左右両斜面はほぼ均等な傾斜と面積をもつ。稜線の中央に小さな凹みがあるが、これは輝石の結晶が剥落したもので人



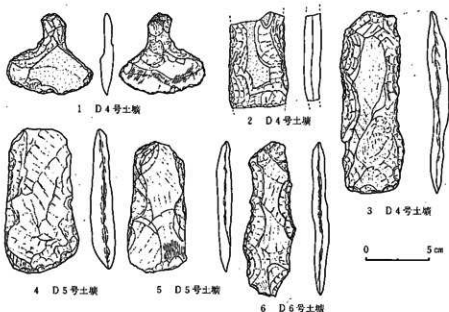
第19图 调查区出土土器拓影No 1 (1:3)



第20图 调查区出土土器拓影No 2 (1:3)



第21図 出土石器実測図 (1:3)



第22図 D4号・D5号土坑出土石器実測図(1:3)

工ではない。両端は一方が稍々巾を縮小して傾斜が強まり、他方にくに従って巾を広げて傾斜がゆるやかになっている。裏面は漆を用いて全面黒色に塗られている。表面は赤褐色の深みのある色調を帯びていて、やはり塗料が塗られているものと考えられる。

この石は、D3号土坑の底に一部赤色塗彩をもつ黒色塗塗りの壺形土器と思われる土器片に添えるように置かれていた。埋葬石である。一応磨石の部類に加えた。

横刃形石器(第21図7・8)

7は、硬砂岩を両面から剥離した薄い楕円形の先端の尖った形で、尖端部から左の一稜(長さ4cm)には、両面から剥離して鋭い刃をつけている。他の周縁部は刃つぶしをしている。J1号住居址より出土。

8は、粘板岩の自然石に打撃を加えて薄く剥離したもので、裏面は自然面であって剥離面と自然面との間にできる鋭い縁辺をそのまま刃部としている。耕作土より出土。

凹石(第21図3)

赤褐色を呈しやや粒子の粗い砂岩を素材とする。表面は平らな剥離面で表面はややくらみをもつ。長円板状と思われる石の破片であるが、表面中央部に直径3cm、深さ7mmのすり鉢状の穴がきれいにつくられている。欠損面に向かって左半分には黒赤褐色に強く熱せられた焼痕がみられる。耕作土より出土。

石匙(第22図1)

粘板岩製長さ6cmの横型石匙である。つまみの端部から打撃を加えて剥離し、表面は第一次剥離面をそのままとし、裏面からの調整によって刃部をつくっている。つまみ部分は表面の第一次

剥離面をさらに薄く調整して、裏面の剥離面との間に入念に調整して作りだしている。裏面の体部には平らな自然面を多く残している。使用痕も顕著である。D4号土墳より出土。

打製石斧（第22図2～6）

本調査区出土の打製石斧は5点を数えるが、2・3がD4号土墳、4・5・6がD5号土墳より出土しており、短冊形（2・3・5・6）、楕形（4）の2つのタイプに区分される。また、2は玄武岩、3は粘板岩、4・5・6は硬砂岩を用いている。

2は、上下両端とも鋭く裁断したような断面をみせて両端を欠失している。両側端は表裏両面から丁寧に調整されている。

3は、表面のまん中に自然面を残している。裏面は剥離面にさらに数回の剥離を加えて調整し、先端刃部は約1cmの巾を以って鉋の刃のように急角度に剥離し、表面から調整して刃をつけている。

4は、表面は平らな剥離面であるが、裏面は左半分と頭部には自然面を残し、中央部にふくらみをつけて、右半分は薄い剥離をして厚みを持たせ、重厚な力強い感じであり、やや返り身である。刃部は両面から丁寧に調整されているが、磨滅していてよく使用されていることがわかる。槌か斧に用いた感じである。

5は、上面には平坦な自然面を残しているが、薄くてふくらみはない。刃部には使用痕が顕著である。

6は、全体が細身で巾が狭いが、特に先端の刃部はナイフのように弧線を描いていて、明らかに裏面側から砥石で鋭く研がれている。研磨された面は鋭く光沢のある黒色を呈している。切先の先端部は欠けているが、この打製石斧は、木材などの素材を削るための刃物として用いられたように考えられる。

（井出 正義）

第5章 考 察

第1節 遺 構

今回調査した佐久西小学校裏遺跡は、かつて踏査した八幡一郎先生が「南佐久郡の考古学的調査」の中で「本郡に於ける遺跡の双壁」と評価しているが、千曲河畔の高野町と北沢川の合流点の間に南から北に向って三角形に突出する台地は、縄文から古墳時代にわたる本郡千曲川左岸の最大の遺跡の一つであったことは、日本一といわれる大形石棒の出土からもうなずけられよう。

この遺跡の北端台地の下方宮の本に、昭和53年に縄文後期の敷石住居址・配石遺構が検出された。今回はこの台地の南端に、縄文後期初頭の土墳墓5基、この土墳墓に付随すると考えられる溝状遺構1、縄文中期曾利Ⅳ式期の住居址1棟、同時代の土墳3基、その他時代の判明できなかった土墳1基が検出された。

過去に於けるこの台地上の出土品は、表面採集や耕作等によるものであるが、勝坂式・加曾利Ⅴ式の縄文中期の土器、石器がその主体をなしている。特に三角埴形土製品は貴重な資料である。続いて、縄文後期堀之内式が多い。また、須恵器坏・土師器坏・埴も散見する。縄文中期の集落は、ほとんどこの台地上全面にわたって散在していたものと思われる。今回の発掘調査に当たっても中期後半の土器が全面にわたって覆土中に散布していた。

まず、各々の遺構について一瞥したい。

縄文時代中期後半の曾利Ⅳ式期の住居址1棟は、南東側の壁が一部調査区域の関係上完掘には至らなかったが、不整な方形を呈し、やや小形の住居址である。炉は、住居址のほぼ中央に位置し、小形の竪穴炉であった。遺物の出土は少量ではあったが、床面直上より胴下部～底部を欠損した、波状口縁の小形キャリパー型深鉢が伏せた状態で存在し、また、大形深鉢の底部がこれと並んで出土した。

覆土は浅く、耕作がすでに床面の10cm直上まで達していた。このため、付近は耕作土を取り除いた直下より、炉や焼土の散布がみられ、幸いに残存したJ1号住居址の他はすでに耕作の段階その大部分が破壊されていたものと思われる。

特にD1・2・3・4号土墳の中間東寄りに露出した炉は、(全体図に位置記入)、44cm×50cmを測る方形石囲炉で、囲い石は西南側に2ヶ残存しており、板状に剝離しやすい安山岩の厚さ4cm程の石を用いている。炉面からの高さは25cm位で、焼土はバリバリで固く、10cmの厚さで堆積していた。相当長期間にわたって使用されたことが推定される。この炉の形態は、川上村大深山遺跡の炉と類似しており、出土土器からも同時期に集落が存在していたものと考えられる。

また、これ等の住居址と同時期に比定されるものと思われる土墳は、D7・8・9号であり、

第2表 検出遺構一覧表

()内推測値

遺構	平面プラン					備考
	形態	規模			主軸方位	
		短径	長径	深さ		
J1号住居址	不整形	460 ^{cm}	(460) ^{cm}	6~10 ^{cm}	N-43°-W	竪穴炉
D1号土壇	不整形	120	(120)	70~76	N-5°-E	蓋・立石状の石組
D2号土壇	円形	106	(106)	47~60	N-36°-E	底面に鉄平石
D3号土壇	楕円形	115	(135)	30~35	N-38°-E	黒・朱塗の土器、石出土
D4号土壇	"	105	(135)	75~88	N-15°-E	石組
D5号土壇	"	130	178	34~55	N-12°-W	石組
D6号土壇	長楕円形	73	170	15~20	N	
D7号土壇	不整形	160	170	13~20	N-23°-E	石棒破片と立石
D8号土壇	楕円形	97	128	6~13	N-18°-E	
D9号土壇	円形	90	100	42~50	N-3°-E	

特にD7号は、立石と丸石を伴った祭祀用の土壇であったと想定される。立石を立てたと思われる底面上には焼土が散布し、赤色塗彩されたこね鉢の口縁部片が置かれていた。該期に隆盛した屋外祭祀の場であろう。D9号は深く、出土遺物は中期後半の土器細片と三角形稜の面を持った磨石1点である。貯蔵穴の要素も伺えるものの底面付近の覆土の状態から判然としないので断定はできない。

D8号土壇は、ほぼ床面に達しており、ようやくその姿をとどめていたにすぎない状態であった。また、D6号は、覆土色調とその状況および形状等から新しい遺構であると思われる。

本調査の中で最も注目される遺構は、縄文後期の土壇墓5基とそれを取り囲むようにして存在する溝状遺構1であろう。これ等は、縄文後期の信仰や墓制についての有力な資料を提出するものであるが、宮の本遺跡と共にその両方も、住宅建設工事の進行中に発見され、限られた期日内に行うという制約下の緊急発掘であったため、集落との関係等その信仰形態の全容に迫ることはできない。

土壇墓の構成は、D1号は、凹面鏡状の円形で、外面に紐通し用の孔をあけた、小把手を付し、内面には黒色の漆を塗った手づくねの土器蓋が底面に置かれ、周囲に骨粉が散見した。そして蓋

の南側後方に石棒状の流紋岩が2ヶ横転し、その上面に鉄平石が置かれていた。流紋岩は熱を受けてところどころ赤変していた。横転の角度から立石状に組まれていたものと思われる。蓋の出土付近に骨粉が散見したことは、葬者の頭に蓋をかぶせた可能性もある。立石が南壁寄りに片寄っていたことも葬者の後方に配石したものと考えられる。

D2号は、底に鉄平石片が断片的に敷かれていた。D3号は、底面に壺形土器の全面に黒色の漆を塗り、さらに一部に朱を塗った特殊な土器を置き、それに添えて川原石1ヶをセットにして置いている。この石の底面も黒色塗彩し上面は赤味がかっていた。

D4号は、大きな鉄平石を壁際、底面に箱状に組み合わせ、その上に大きな川原石を縦に横に塔のように積み上げている。横型石匙1、打製石斧2点が石の間から出土した。

D5号は、大きな円形の川原石4ヶを用い、2ヶを底面に重ね、さらに2ヶを左右に立てかけて組み合わせている。覆土中より3個の打製石斧が出土した。

以上の土壌に組み合わせられた石は、長さ、巾ともに45cm前後に統一されている。このようにD1号～D5号まで各々の多様な様式がみられるが、いずれも屈葬のように石を以て地下に死霊を封じこめるような形のものではなく、靈魂を崇め、その再生を願うような思想が現われているように思われる。D5号の場合は、葬者への安座が心をこめて設けられているような感じをうける。

前述したように、溝状遺構はこれ等の墓塚を取り囲むように存在する。完掘に至らなかったため断定はできないが、土塚墓群の南を画する境界を示すものであるように想定される。

この台地上からは、北に浅間山、西に八ヶ岳、立科山、東南に茂来山(1717.8m)が望める。調査地区は、台地の最高部に近く南東面する位置にあるので、茂来山が最もよくまじかに眺められる。台地上東北傾斜面の現三本木団地、或いは西斜面の小学校側に集落を営んだ人々が、(小学校敷地では戦前奉安殿建設の際、敷石住居址が出ている。)茂来山がよく見え、眼下に流れる千曲川を見下ろすこの南東側を墓域として選定したと思われる。この地域はかつて縄文中期後半に集落が営まれていた地区であり、集落の廃絶と人間生活の中断、そして再び営まれた集落の墓域の場であった。

該期における墓は、石棺状遺構が最も顕著である。その代表例は、飯山市宮中遺跡、御代田町宮平遺跡、軽井沢町茂沢南石堂遺跡、山梨県大泉村の金生遺跡、同高根町青木遺跡(21基の検出があった)等以上の遺跡があげられる。

しかし、本遺跡では円形土塚墓型の群集墓が検出された。類似の土塚墓が小泉深町遺跡で1基検出されている。特に、D4号は河原石の形がよく、きれいに磨滅している安山岩と鉄平石が箱状に組まれており、石棺蓋的な要素はうかがえるものの、その状態は石棺とまではいかない石組である。その他、D1・2・3号は前述の如くそれぞれバラエティーに富んだ埋葬がなされている。

縄文社会の集落の構造は、馬蹄形に堅穴住居址が配置され、その住居址群の外側に墓域が設定されるといった構造が多い。原村の阿久遺跡もそうした代表的な構造を持ちうる。本遺跡も小学

校側から団地にかけての南北西側に集落が営まれたその所産であろう。

また、後期土壌墓群の中央に基礎工事ですでに破壊されてしまった土壌の位置を全体図に明示したが、土壌墓群の広がりを把握する上で重要である。

第2節 遺物

遺物は、J1号住居址・調査区出土土器・石器の章で詳細に前述している関係上、ここでは問題点についてふれてみたい。

まず、J1号住居址出土の小形キャリパー型深鉢は、胴下部～底部を欠失し、伏せた状態で出土しており、口縁部は隆帯と沈線の渦巻文を持ち地文は縄文である。曾利Ⅳ式期に比定される。これと同様な例が、佐久市根岸中村遺跡J4号住居址、川上村大深山遺跡第23号住居址で見られる。両遺跡共、口径45cmを測る大形の深鉢であるが、やはり胴下部～底部を欠失して床面に伏せられて出土しており、一般的な伏襲のあり方を示している。文様も同様に口縁部が渦巻文で地文は縄文である。中村遺跡は同時期の曾利Ⅳ式期にあたる。このような伏襲については、武藤雄六山本陣久氏が廃屋墓群にともなう裏張り葬説としての論拠を提出している。しかし、本遺跡では住居址1棟のみの検出であったため、この点について充分な検討が加えられない。ただ、伏襲の隣りに大形深鉢の底部が正位の状態で並んで出土したことが注目される。

その他、拓影に図示した縄文中期の土器は、地文に縄文を持つものと、篋描き沈線文との2種類に大別される。この内の篋描沈線文は、大柄でくずれた感を呈するもの、唐草文系の影響を受けた綾彩文の明確な文様が見当たらないことから、曾利式に位置付けられる。しかし、縄文系は曾利式と加曾利Ⅴ式との分離は速断できない。

縄文後期の土器片は、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期に比定されるものが大部分である。

D1号～D5号土壌の出土遺物は、D1号より縄文後期初頭に比定される。蓋が出土した。ひも通し孔を有しており、同類のものが曾利遺跡52号址から出土している。

D3号からは、全面黒漆塗彩と部分的に朱色塗彩された壺形土器と思われる特殊な土器が、同じように黒色塗彩した石を抱くような状態で出土した。このような壺形土器にD1号出土のような蓋が必要であろう。蓋形土器の内面にも黒色塗彩が施されていた。

また、D4号、D5号土壌からは各々3点ずつの石器の出土があった。両土壌は、石組が配されており共通点が多い。石組一石器という埋葬方法に何等かの思想がこめられていたのであろう。

(井出 正義・島田 恵子)

引用参考文献

1. 高橋 桂 「宮中遺跡」 長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信） 1982
2. 五十嵐幹雄 「深町遺跡」 " " " "
3. 林 幸彦 「宮平遺跡」 " " " "
4. 林 幸彦他 「中村遺跡」 佐久市教育委員会 1983
5. 八幡 一郎 「南佐久郡の考古学的調査」 歴史図書社 1978
6. 八幡 一郎 「信濃大深山遺跡」 川上村教育委員会 1976
7. 上野 佳也他 「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」 軽井沢教育委員会 1983
8. 武藤 雄六・小林 公明他 「曾利」 富士見町教育委員会 1978
9. 長崎 元広他 「中部高地縄文土器集成」 第1集 中部高地縄文土器集成グループ1979
10. 森 尚登他 「明尊寺・茶臼山遺跡」 牟礼村教育委員会 1980
11. 井出 正義他 「宮の本遺跡」 佐久町教育委員会 1979
12. 春成 秀爾 「縄文合葬論」 信濃32-4 1980
13. 伊藤 玄三 「東北日本における弥生時代の墓制」 東北大学文化25-3 1961
14. 斎藤 忠 「日本における再葬（洗骨葬）の展開」 大正大学研究紀要 1977
15. 水野 正好 「集落」 考古学ジャーナル 100 1974
16. 大泉村教育委員会 「金生遺跡」 1981
17. 山本 暉久 「住居跡内に倒置された深鉢形土器について」 神奈川考古1 1976

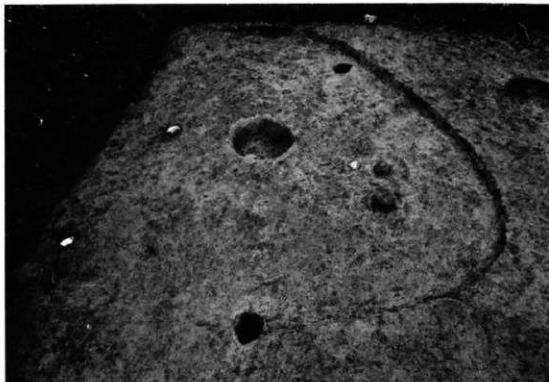
☒ 版



1. 佐久西小学校裏遺跡遠景（北西方より）



2. 佐久西小学校裏遺跡発掘調査第2区全景



1. J1号住居址（北東より）



2. D1号土壇（東方から）



1. D2号土塙(西方より)



2. D3号土塙(西方より)



1. D4号土壇（西方より）



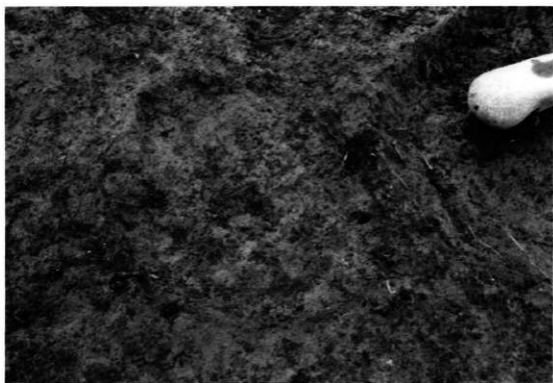
2. D5号土壇（東方より）



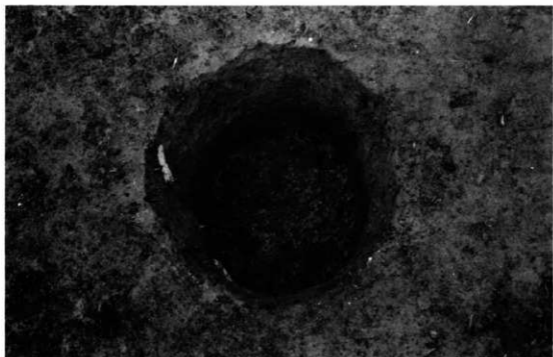
1. D6号土構（北方より）



2. D7号土構（西方より）



1. D8号土壤



2. D9号土壤



18-1



18-2

J 1 号住居址出土土器



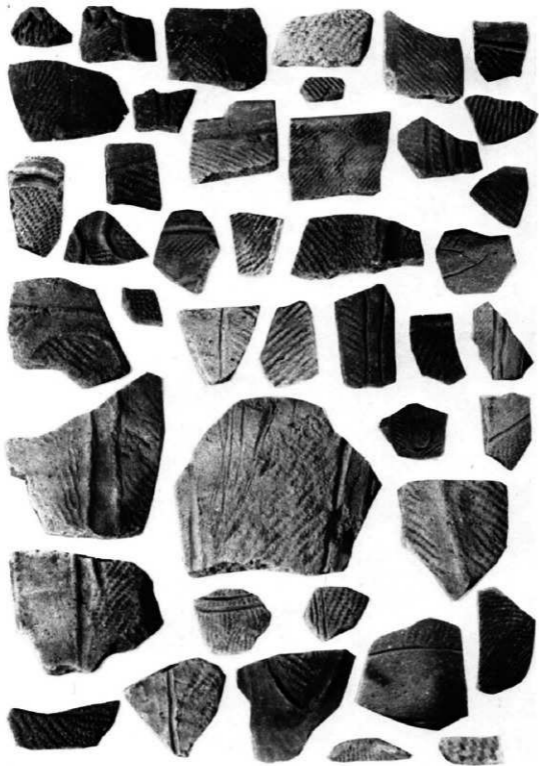
18-4

D 1 号土城



18-3

D 3 号土城



第19図 調査区出土土器片No.1 (寸)



縄文中期後半の土器片



縄文後期の土器片



22-6



22-2



22-1



22-4



22-5



22-3



21-1



21-2



21-3



21-4



21-8



21-5



21-6



21-7

佐久西小学校裏遺跡

南佐久郡佐久町緊急発掘調査報告書

発行 昭和59年3月30日

編集 佐久西小学校裏遺跡調査団

発行 南佐久郡佐久町教育委員会

印刷 ほおずき書籍館



